『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（四）

角田泰隆

凡例

一、本稿は、二〇一八年における、駒澤大学大学院の角田ゼミ（宗学特講Ⅱ【演習】）で作成した資料を基に作成したものである。

二、【本文】は、本山版『正法眼蔵』（寛政十一年〈一七九九〉刊）を底本とし、左記の『正法眼蔵』諸本と校異して作成した。「校異」は本文下段に示したが、字体の違い（新字・旧字・異体字等）の校異は略した。諸写本によって底本の本文を改めた部分もあるが、その場合は校異に示した。校異した諸本の略号は次の通りである。なお、これらの写本は全て『蒐書大成』に収録されている。

懐奘書写本…懐　正法眼蔵抄…抄　乾坤院所蔵本…乾　正法寺所蔵本…正　龍門寺所蔵本…龍
洞雲寺所蔵本…洞　瑠璃光寺所蔵本…瑠　長円寺所蔵本…長　玉雲寺所蔵本…玉　徳雲寺所蔵本…徳
永平寺所蔵嘉元二年（一三〇四）書写本…嘉

三、【本文】は便宜的に適宜分割し、最初に段落分けを示すため【本文】のみをまとめて掲げ、番号を付した。底本の片仮名は平仮名に改め（子→ね、ヰ→ゐ、ヱ→ゑ）、内容解釈に基づいて独自の句読点とルビを付した。【本文】・【懐奘書写本】の漢字は原典の字体をそのまま用いたが、【本文】以外は、【本文】からの引用も含めて、原則として新字体に改めた。

四、【語註】は既刊の辞典等を参照して新たに作成したが、辞典等をそのまま引用したものについては典拠を明記した。【語註】・【解説】で『正法眼蔵』を引用する場合は、大久保道舟編『古本校訂正法眼蔵全』（筑摩書房、一九七一年四月）より引用し、頁数のみ記した。但し、既刊の「『正法眼蔵』「仏性」巻訳註」収録箇所は、当該号の略号と頁数で示した。

引用文中の傍点・傍線は、全て筆者が付したものである。参照文献・辞典の略号は次の通りである。

『大正新脩大蔵経』…『大正蔵』　大日本続蔵経…『卍続蔵』
『景徳伝燈録』（禅文化研究所、一九九〇年五月）…『禅文化本』
中村元編『仏教語大辞典』（東京書籍、一九八一年五月）…『中村仏教』
『新版禅学大辞典』（大修館書店、一九八五年十一月）…『禅学』
入矢義高・古賀英彦編『禅語辞典』（思文閣出版、一九九一年七月）…『禅語』
『大漢和辞典』…『大漢和』　『漢辞海』第三版（三省堂、二〇一一年二月）…『漢辞海』
大久保道舟編『道元禅師全集』下巻（筑摩書房、一九七〇年五月）…『大久保本』
水野弥穂子校註　岩波文庫本『正法眼蔵』（一九九〇～一九九三年）…『岩波文庫本』
『道元禅師全集』（春秋社〈原典版〉、一九八八～一九九一年）…『春秋社本』
『道元禅師全集』（春秋社〈原文対照現代語訳版〉、一九九九～二〇〇三年）…『春秋社本〈現代語訳版〉』
『永平正法眼蔵蒐書大成』（大修館書店、一九七四～一九八二年、続輯一九八九～二〇〇〇年）…『蒐書大成』
角田泰隆「『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（一）」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十四号、二〇一六年三月…「仏性訳註（一）」
角田泰隆「『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（二）」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十五号、二〇一七年三月…「仏性訳註（二）」
角田泰隆「『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（三）」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十六号、二〇一八年三月…「仏性訳註（三）」

五、【直訳】は、できる限り本文に忠実に訳し、基本的に古文を現代語に訳すにとどめ、一部便宜的に漢字用語の現代語訳も行った。

六、【現代語訳】は、【直訳】に基づいて漢字用語の解説を加え、理解しやすくするために〈　〉内に本文にない言葉を補い、必要に応じて（　）内に直前の語の解釈を付した。

七、【懐奘書写本に見られる書き改めについて】は、懐奘書写本の書き改めの前後でどのように内容が変化したかについ

て特に解説した。書き改めが少ない場合は、【語註】あるいは【解説】の中で簡単に言及する形とし、一切無い場合は略した。【懐奘書写本】掲載の理由については、「仏性訳註（一）」七七頁を参照されたい。

【本文】

① 震旦第六祖曹谿山大鑑禪師、そのかみ黄梅山に參ぜしはじめ、五祖とふ、なんぢいづれのところよりかきたれる。六祖いはく、嶺南人なり。五祖いはく、きたりてなにごとをかもとむる。六祖いはく、作佛をもとむ。五祖いはく、嶺南人無佛性、いかにしてか作佛せん。

この嶺南人無佛性といふ、嶺南人は佛性なしといふにあらず、嶺南人は佛性ありといふにあらず、嶺南人無佛性となり。いかにしてか作佛せんといふは、いかなる作佛をか期するといふなり。

おほよそ佛性の道理、あきらむる先達すくなし。諸阿笈摩教および經論師のしるべきにあらず。佛祖の兒孫のみ單傳するなり。佛性の道理は、佛性は成佛よりさきに具足せるにあらず、成佛よりのちに具足するなり。佛性かならず成佛と同參するなり。この道理よくよく參究功夫すべし、三二十年も功夫參學すべし。

② 十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有佛性、衆生無佛性と道取する、この道理なり。成佛已來に具足する法なりと參學する、正的なり。かくのごとく學せざるは、佛法にあらざるべし。かくのごとく學せずば、佛法あへて今日にいたるべからず。もしこの道理あきらめざるには、成佛をあきらめず、見聞せざるなり。このゆゑに、五祖は向佗道するに、嶺南人無佛性と爲道するなり。見佛聞法の最初に、難得難聞なるは、衆生無佛性なり。或從知識、或從經巻するに、きくことのよろこぶべきは衆生無佛性なり。一切衆生無佛性を見聞覺知に參飽せざるものは、佛性いまだ見聞覺知せざるなり。六祖、もはら作佛をもとむるに、五祖、よく六祖を作佛せしむるに、佗の道取なし、善巧なし、ただ嶺南人無佛性といふ。

しるべし、無佛性の道取・聞取、これ作佛の直道なりといふことを。しかあれば、無佛性の正當恁麼時、すなはち作佛なり。無佛性いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作佛せざるなり。

③ 六祖いはく、人有南北なりとも、佛性無南北なり。この道取を擧して、句裏を功夫すべし。南北の言、まさに赤心

に照顧すべし。六祖道得の句に宗旨あり。いはゆる、人は作佛すとも佛性は作佛すべからずといふ一隅の搆得あり。六祖これをしるやいなや。

四祖五祖の道取する無佛性の道得、はるかに罣礙の力量ある一隅をうけて、迦葉佛および釋迦牟尼佛等の諸佛は作佛し轉法するに、悉有佛性と道取する力量あるなり。悉有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん。しかあれば、無佛性の語、はるかに四祖五祖の室よりきこゆるなり。このとき、六祖その人ならば、この無佛性の語を功夫すべきなり。

有無の無はしばらくおく、いかならんかこれ佛性と問取すべし、なにものかこれ佛性とたづぬべし。いまの人も、佛性とききぬれば、さらにいかなるかこれ佛性と問取せず、佛性の有無等の義をいふがごとし。これ倉卒なり。

しかあれば、諸無の無は、無佛性の無に學すべし。六祖の道取する人有南北、佛性無南北の道、ひさしく再三撈摝すべし。まさに撈波子に力量あるべきなり。六祖の道取する人有南北、佛性無南北の道、しづかに拈放すべし。おろかなるやからおもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、佛性は虚融にして南北の論におよばず、と六祖は道取せりけるか、と推度するは、無分の愚蒙なるべし。この邪解を抛却して、直須勤學すべし。

④

六祖示門人行昌云、無常者卽佛性也、有常者卽善悪一切諸法分別心也。

いはゆる六祖道の無常は、外道・二乘等の測度にあらず。二乘・外道の鼻祖鼻末、それ無常なりといふとも、かれら窮盡すべからざるなり。しかあれば、無常のみづから無常を説著・行著・證著せんは、みな無常なるべし。今以現自身得度者、卽現自身而爲説法なり、これ佛性なり。さらに或現長法身、或現短法身なるべし。常聖これ無常なり、常凡これ無常なり。常凡聖ならんは、佛性なるべからず。小量の愚見なるべし、測度の管見なるべし。佛者小量身也、性者小量作也。このゆゑに六祖道取す、無常者佛性也。

常者未轉なり。未轉といふは、たとひ能斷と變ずとも、たとひ所斷と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかはれず。ゆゑに常なり。しかあれば、艸木叢林の無常なる、すなはち佛性なり。人物身心の無常なる、これ佛性なり。國土山河の無常なる、これ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提、これ佛性なるがゆゑに無常なり。大般涅槃、これ無常なるがゆゑに佛性なり。もろもろの二乘の小見、および經論師の三藏等は、この六祖の道を驚疑怖畏すべし。もし驚疑せんことは、魔外の類なり。

※各段の資料作成担当者は左記の通りである（所属・課程年次は本稿提出当時のもの）。
①中野智教（修士課程二年）②坪井智聡（同前）③菅野優子（同前）④藤川直子（博士後期課程二年）
なお本稿は、右記の資料作成者に加えて、以下のゼミの参加者を加えて検討した共同研究である。
秋津秀彰（曹洞宗総合研究センター研究員）、横山龍顯（大学院研究生）、水田泰成・本山水悠（修士課程一年）、阿部伸二・玉井宏道・吉田裕（聴講生）

※資料作成に当たっては、左記の諸氏が過去において同ゼミで作成した資料を参考にした。記して謝意を表する。
植草佳奈子、高崎秀一（敬称略）

震旦第六祖曹谿山大鑑禪師、そのかみ黄梅山に參ぜしはじめ、五祖とふ、なんぢいづれのところよりかきたれる。六祖いはく、嶺南人なり。五祖いはく、きたりてなにごとをかもとむる。六祖いはく、作佛をもとむ。五祖いはく、嶺南人無佛性、いかにしてか作佛せん。

この嶺南人無佛性といふ、嶺南人は佛性なしといふにあらず、嶺南人は佛性ありといふにあらず、嶺南人無佛性となり。いかにしてか作佛せんといふは、いかなる作佛をか期するといふなり。

おほよそ佛性の道理、あきらむる先達すくなし。諸阿笈摩教および經論師のしるべきにあらず。佛祖の兒孫のみ單傳するなり。佛性の道理は、佛性は成佛よりさきに具足せるにあらず、成佛よりのちに具足するなり。佛性かならず成佛と同參するなり。この道理よくよく參究功夫すべし、三二十年も功夫參學すべし。

黄―右「ワウ」アリ（抄）
ふ―う（乾）　ん―む（抄）
いづれのところ―何處（瑠）
きた―来（瑠）、以下略
祖―右下「ノ」アリ（龍）、以下略
いはく―曰（抄）（瑠）、いわく（乾）、以下略
なり―也（瑠）
なにごと―何事（抄）、何ごと（洞）、何亥（瑠）
人―右下「ニ」アリ（龍）
無―左下「シ」アリ（龍）
性―左下「一」アリ（龍）
ん―む（抄）
この―此（瑠）、以下略
嶺南人～あらず（三十文字）―ナシ（乾）
なし―無（瑠）、なひ（正）

ほ―ナシ（瑠）
諸―右下「ノ」アリ（正）（龍）、右「ショ」アリ（瑠）
笈―右「キウ」アリ（瑠）
お―を（洞）（瑠）

よく―ナシ（乾）、〳〵（懐）（洞）（瑠）（長）（徳）、ゝ（龍）
功夫……（嘉）ノ本文ココヨリ始マル
三二十年―三拾年二十年（正）

【懐奘書写本】

震旦第六祖曹谿山大鑒禪師、そのかみ黄梅山に参ぜしはじめ、五祖とふ、なんぢいづれのところよりかきたれる。六祖いはく、嶺南人なり。五祖いはく、きたりてなにごとをかもとむる。六祖いはく、作佛をもとむ。五祖いはく、嶺南人無佛性。いかにしてか作佛せん。

この嶺南人無佛性といふ、嶺南人は佛性なしといふにあらず、嶺南人は佛性ありといふにあらず、嶺南人無佛性としめすなり。いかにしてか作佛せんといふは、いかなる作佛をか期するといふなり。

おほよそ佛性の道理、あきらむる先達すくなし。諸阿笈摩教および經論師のしるべきにあらず。佛祖の兒孫のみ単傳するなり。佛性の道理は、佛性成佛よりさきに具足せるにあらず。成佛よりのちに具足するなり。この道理よく〳〵參究功夫すべし。三二十年も功夫參學すべきなり。

【語註】

震旦～作仏せん…この話の出典について『道元引用語録の研究』（春秋社、一九九五年三月）では五つの二次出典を挙げ（二五〇～二五一頁）、各々さほど相違はないが、本文の「震旦第六祖曹谿山大鑑禪師、そのかみ黄梅山に参ぜしはじめ」の部分は『建中靖国続燈録』巻一、大鑑慧能章の「居黄梅山。大振玄風。有盧居士遠来」が最も近いと思われる。ちなみに『建中靖国続燈録』巻一、大満弘忍章には、「五祖弘忍大満禪師、童児得道、乃栽松道者後身。居黄梅東山、大振玄風。有盧居士遠来。師曰、汝什麼処来。答曰、嶺南来。師曰、来作什麼。答曰、来求作仏。師曰、汝嶺南人無仏性（五祖弘忍大満禪師、童児にして道を得。乃ち栽松道者の後身なり。黄梅東山に居して、大いに玄風を振う。盧居士有りて遠きより来る。師曰く、汝什麼処よりか来る。答えて曰く、嶺南より来る。師曰く、来りて什麼をか作さん。答えて曰く、来りて作仏を求む。師曰く、汝嶺南人無仏性なり）」（『卍続蔵経』一三六・二三頁）とある。またこの話は、『永平広録』六・四三一上堂にも取り上げられているほか、六祖の伝記を和文で記した「堆米事」（『正法眼蔵聞書抄』三十一）にも見られる。「堆米事」では、「ハじめて大満にめへたてまつるにとひたまふ。你ハいづくの人ぞ。云く、嶺南の人なり。大満の云ク、何事を求てかここに来れる。云ク、仏にならむことを求ム。大満の云く、嶺南ノ人ニハ仏性なし。何

としてか仏にならむ。祖ノ云ク、人ニハ南北ありとも仏性にハ南北あらじ」（『蒐書大成』十四・六三三～六三四頁）とある。これらは、【語註】末に対照表として示した。**震旦**…古代インド人が中国を呼んだチーナスターナ（秦土の意）の音訳。漢土・唐土と同じく中国をさす（『禅学』六一九頁）。**第六祖曹谿山大鑑禅師**…中国禅宗六祖大鑑慧能（六三八～七一三）。「六祖大師」「曹渓大師」などとも呼ばれる。俗姓は盧氏、嶺南の新州（広東省）の人。若くして蘄州（湖北省）の黄梅山の五祖弘忍に参じ、印可を得た後、嶺南に帰って韶州（広東省）の曹渓山宝林寺や大梵寺を中心に布教を行い、新州の国恩寺で没した（『岩波仏教辞典』第二版、岩波書店、二〇〇二年十月、九一頁）。法嗣に荷沢神会（六七〇～七六二）、青原行思（六七三～七四一）、南嶽懐譲（六七七～七四四）等がいる。慧能の書として代表的なものに『六祖壇経』があるが、道元禅師は『正法眼蔵』「四禅比丘」巻で「六祖壇経に見性の言あり、かの書これ偽書なり。附法蔵の書にあらず、曹渓の言句にあらず。仏祖の児孫、またく依用せざる書なり」（七〇八頁）と述べており、「見性」の語を使う『六祖壇経』を「偽書」であるとして痛烈に批判している。**黄梅山**…蘄州（湖北省）黄梅県西四〇里にあり、一名漏頭山と称す。山中に梅が多いのでこの名がある（『禅学』一一三頁）。ここでは五祖弘忍のこと。**五祖**…中国禅宗五祖大満弘忍（六〇一～六七四）。「仏性訳註（三）」一六～一七頁参照。**嶺南人無仏性**…「嶺南人」は、嶺南地方出身の人物を指す。中国の中部と南部の境界をなす山脈を南嶺、その南を嶺南といい、この地方の人々は無知蒙昧で、仏たり得ないとされた。慧能は広東の東南、新州の出身（『禅学』一三〇六頁）。『岩波文庫本』（一・八七頁）等では「れいなんじん」と読んでいるが、本稿では『禅学』にならい「れいなんにん」とした。『正法眼蔵聞解』には、「嶺南人無仏性トハ、有リ無シト云ニハ非ズ。仏性本ヨリ不レ有不レ無モノ、只無仏性也ト。般若ノ大空ヲヲ（ママ）明ス空裏一片石ノ意ヲ見ルベシ」（『蒐書大成』十七・一四～一五頁、句読点・濁点筆者）とあり、「嶺南人無仏性」という表現における「仏性」の語は、仏性それ自体の性質について言及しているのではなく、「ただ無仏性である」としている。前段に「無仏性の道、かならず精進すべし、趑趄することなかれ」（「仏性訳註（三）」二九頁）とあることからも、道元禅師が「無仏性」の語そのものを重要視していることが窺える。詳細は【解説】参照。**作仏**…仏となること。成仏すること。作はなる（『禅学』三八六頁）。**期する**…期待する。求める。**おほよそ**…「おほ」は大、物事を大きく、概括していうときに用いる。「およそ」とも。大概。一般。そもそも（『角川古語大辞典』第一巻、角川書店、一九八二年六月、六一五頁）。**阿笈摩教**…前段の用例（「仏性訳註（二）」一五二頁）とは異なり、ここではいわゆる小乗教（上座部仏教）のこと。『景徳伝燈録』巻

六「禅門規式」には、「豈当与諸部阿笈摩教為随行耶（旧梵語阿含。新云阿笈摩。即小乗教也）（豈に当に諸部の阿笈摩教と随い行うを為すべけんや。旧梵語は阿含、新に云く阿笈摩と。即ち小乗教なり）」（『禅文化本』一〇一頁）とある。**経論師**…経師・論師のこと。経文を講義したり、読誦する僧。文字に書かれた経によってのみ仏法の意義を解し、実践を欠くものの意味に用いる（『禅学』二三一頁）。**児孫**…仏法の上で仏祖の法をつぐ者（『禅学』四四三頁）。**単伝**…仏法が釈尊から真っ直ぐ伝わってきたこと。「仏性訳註（一）」八一頁参照。**同参**…同時に備わること。「仏性」巻の後段に「説著あらば聞著と同参なるべし」（二八頁）という用例があるが、懐奘書写本によれば、本段においては書き改め後に追加されたものであるのに対し、後段の用例は書き改め以前よりあったものである。**参究功夫**…「参究」・「功夫」は共に弁道修行する意（『禅学』三九〇頁）。**三二十年**…三十年も二十年も。『景徳伝燈録』巻二十八、「諸方広語」の「趙州従諗和尚語」には「且実際理什麼処著得。一心不生万法無咎。汝但究理坐看三二十年（且らく実際の理は什麼の処にか著得せん。一心は生ぜず万法は咎無し。汝但だ理を究め坐して看ること三二十年せよ）」（『禅文化本』五九二頁）とあり、「三十年でも二十年でも坐してみよ」と説示している。この語は禅の語録によく見られる常套語であるが、この年限は仏祖相伝の一代の年限でもあり、〝一生涯〟と解釈してもよいであろう。**功夫参学**…純一に修行に精進すること（『禅学』二五二頁）。「参学」は、参禅学道の略（『禅語』一六五頁）。

『正法眼蔵』「仏性」巻	『永平広録』六・四三一上堂	『建中靖国続燈録』一	「堆米事」
震旦第六祖曹渓山大鑑禅師、そのかみ黄梅山に参ぜしはじめ、五祖とふ、なんぢいづれのところよりかきたれる。六祖いはく、嶺南人なり。五祖いはく、きたりてなにごとをかもとむる。六	上堂。記得。盧行者詣五祖。祖問、汝是甚処人。盧云、嶺南人。祖云、欲求何事。盧云、求作仏。祖云、嶺南人無仏性。盧云、人有南北、仏性豈有南北耶。祖、知是器、遂入行堂。五	五祖弘忍大満禅師、童児得道、乃栽松道者後身。居黄梅東山、大振玄風。有盧居士遠来。師曰、汝什麼処来。答曰、嶺南来。師曰、来作什麼。答曰、来求作仏。師曰、汝嶺南人無仏	ハじめて大満にみへたてまつるに、とひたまふ。汝はいづくの人ぞ。云く、嶺南の人なり。大満の云く、何事を求てかここに来れる。云く、仏にならむ事を求む。大満の云く、嶺南の人にハ

祖いはく、作仏をもとむ。五祖いはく、嶺南人無仏性、いかにしてか作仏せん。（中略）六祖いはく、人有南北なりとも、仏性無南北なり。	祖・六祖雖恁麼道、永平児孫聊有道処。大衆還要委悉麼。雖拈一茎草、未供五茎華（『大久保本』一〇九頁）。	性。答曰、人有南北、仏性豈有南北。師叱曰、着槽廠去（『卍続蔵経』一三六・二三頁）。	仏性なし、何としてか仏にならむ。祖の云ク、人ニハ南北ありとも、仏性には南北あらじ（『正法眼蔵聞書抄』三十一所収、『蒐書大成』十四・六二三～六三四頁）。

【直訳】

震旦国の第六祖曹谿山大鑑禅師が、その昔黄梅山に参じた初めに、五祖が問うた、「お前はどこから来たのか」。六祖は言った、「嶺南人です」。五祖は言った、「来て何事を求めるのか（いかにしてか作仏せん）」。六祖は言った、「作仏を求めるのです」。五祖は言った、「嶺南人無仏性、どのような作仏を期待するのか（いかにしてか作仏せん）」。

この「嶺南人無仏性」というのは、「嶺南人は仏性がない」と言っているのではなく、「嶺南人は仏性がある」と言っているのでもなく、「嶺南人無仏性」と〈言っている〉のである。「いかにしてか作仏せん」と言うのは、「どのような作仏を期待するのか」と言うのである。

およそ仏性の道理を、明らかにしている先達は少ない。諸の阿笈摩教や経論師が知る筈がない。仏祖の児孫だけが単伝するのである。仏性の道理は、仏性は成仏より先に具足しているのではなく、成仏より後に具足するのである。仏性は必ず成仏と同参するのである。この道理をよくよく参究功夫しなさい、三十年も二十年も功夫参学しなさい。

【現代語訳】

中国の禅宗第六祖の曹谿山大鑑慧能禅師が、その昔、黄梅山〈の五祖弘忍〉に参じた最初に、五祖が、「お前はどこから来たのか」と尋ねた。六祖は言った、「嶺南人（嶺南出身の者）です」。五祖は言った、「嶺南からやって来て何を求めるのか」。六祖は言った、「仏となることを求めるのです」。五祖は言った、「嶺南人無仏性、いかにしてか作仏せん（嶺

南人は無仏性である、どのような作仏を期待するのか）」。

この「嶺南人無仏性」というのは、「嶺南人は仏性がない」と言っているのではなく、「嶺南人は仏性がある」と言っているのでもなく、「嶺南人無仏性（嶺南人もすでに仏であるのだから、さらに仏になる必要はない）」〈と言っているの〉である。「いかにしてか作仏せん」と言っているのは、「〈すでに仏であるのに、さらに〉どのような作仏を期待するのか」と言っているのである。

そもそも仏性の道理を、明らかにしている先人達は少ない。諸々の阿笈摩教や経師・論師が知るはずがない。仏祖の法を嗣いだ児孫だけが伝えているのである。仏性の道理は、仏性は成仏するより先に具わっているのではなく、成仏より後に具わるのである。仏性は必ず成仏と同時に具わるのである。この道理をよくよく参究功夫すべきである、三十年も二十年も功夫参学すべきである。

【懐奘書写本に見られる書き改めについて】

本段における書き改めであるが、「嶺南人無仏性としめすなり」の「しめす」が削除されている。また、「成仏よりのちに具足するなり」の後に「仏性かならず成仏と同参するなり」と加えられている。また、「三二十年も功夫参学すべきなり」の「すべきなり」を「すべし」と改めている。

十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有佛性、衆生無佛性と道取する、この道理なり。成佛已來に具足する法なりと參學する、正的なり。かくのごとく學せざるは、佛法にあらざるべし。かくのごとく學せずば、佛法あへて今日にいたるべからず。もしこの道理あきらめざるには、成佛をあきらめず、見聞せざるなり。このゆゑに、五祖は向佗道するに、嶺南人無佛性と爲道するなり。見佛聞法の最初に、難得難聞なるは、衆生無佛性なり。或從知識、或從經巻するに、きくことのよろこぶべきは衆生無佛性なり。一切衆生無佛性を見聞覺知に參飽せざるものは、佛性いまだ見聞覺知せざるなり。六祖、もはら作佛をもとむるに、五祖、よく六祖を作佛せしむるに、佗の道取なし、善巧なし、ただ嶺南人無佛性といふ。しるべし、無佛性の道取・聞取、これ作佛の直道なりといふことを。しかあれば、無佛性の正當恁麼時、すなはち作佛なり。無佛性いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作佛せざるなり。

ところ—處（瑠）
この—此（抄）（瑠）
なり—也（正）、以下略
已—以（懐）（抄）（洞）（瑠）（嘉）
なり—也（瑠）、以下略
かくのごとく—如レ是（瑠）、以下略
ざるは—ざれば（洞）
ずば—ずんば（瑠）
へ—ゑ（正）（瑠）
もしこの—若此（瑠）
ゆゑ—ゆへ（懐）（乾）（龍）（洞）（長）（玉）、故（瑠）
向佗道—右、カウタタウ（瑠）、向レ他道（龍）
佗—他（懐）（正）（龍）（瑠）（長）（玉）（徳）（嘉）、以下略
嶺南人無佛性—嶺南人二無レ佛性（龍）
る—れ（乾）
或從知識或從經巻—或二從レ知識一或二從レ經巻一（龍）、或從レ知識或從經巻（玉）
或—惑、右「アルイハ」アリ（正）
從—ナシ（乾）
きくこと—聞事（抄）
覺—ナシ（乾）
善巧—左「ヨクタクミ」アリ（瑠）
聞—問（正）（龍）（瑠）
これ—是（瑠）
あ—ナシ（乾）（正）（龍）（瑠）
佛—ナシ（乾）
麼—右下「ノ」アリ（龍）
いまだ—未（瑠）

【懐奘書写本】

十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有佛性、衆生無佛性と道取するところにこの道理なり。成佛以来に具足する法なりと参学するを正的として学すべきなり。かくのごとく学せざるは佛法にあらざるべし。もしこの道理あきらめざるには、成佛をあきらめず、見聞せざるなり。このゆへに、五祖は向他道するに、嶺南人無佛性と為道するなり。見佛聞法の最初に、難得難聞なるは、衆生無佛性なり。或従知識、或従経巻するに、きくことのよろこぶべきは衆生無佛性なり。一切衆生無佛性を見聞覚知に参飽せざるものは、佛性いまだ見聞覚知せざるなり。六祖、もはら作佛をもとむるに、五祖、よく六祖を作佛せしむるに、他の道取なし、善巧なし。た、嶺南人無佛性といふ。

しるべし、無佛性の道取・聞取、これ作佛の直道なりといふことを。しかあれば、無佛性の正当恁麼時、すなはち作佛なり。無佛性いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作佛せざるなり。

【語註】

十聖三賢…さとりの段階による賢聖の区別。「十聖」は、十地の聖者をいう。地前（十地より前）の三十位を三賢というのに対し、十地という十の位を指す（『中村仏教』五九三頁）。「三賢」は、天台・華厳の教学では、菩薩の階位のうちの十住、十行、十回向をいう（『中村仏教』四六一頁）。**衆生有仏性・衆生無仏性**…「仏性」巻後半で示される「大潙衆生無仏性」話（二七頁）の語。「仏性訳註（三）」三三二頁参照。**正的**…間違いのないこと。ぴったり当っていること。正当的確（『禅学』五七〇頁）。**見仏聞法**…正師について正法を聞くこと（『中村仏教』三三三頁）。**或従知識、或従経巻**（或いは知識に従い、或いは経巻に従う）…『摩訶止観』巻一大意章五略段発大心の六即義名字即で説かれる成句。善知識に親近して教えを聞き（従知識）、経典を学ぶ（従経巻）ことで、一切の文言や事象は仏法そのものであることがさとれるという意味。経文に即してさとりが現れ、真に信じられる仏法を観ることができると説く。道元はこの文句をしきりに引用して、教外別伝、不立文字を喧伝する従来の禅者たちの学び方の未熟さを指摘する（『禅の思想辞典』、東京書籍、二〇〇八年六月、五〇八頁）。**見聞覚知**…見たり、聞いたり、考えたり、知ったりすること、人間の感覚・知覚作用。また、眼識が見、耳識が聞、鼻・舌・身の三識が覚、意識が知と、六識のそれぞれのはたらきに対応する（『禅の思想辞

典』一九〇頁）。**参飽**…十分に会得すること。（『禅学』四〇九頁）。参は仏道の参学、飽は飢えを満たす意。句意は仏道の参究を完成すること（中村宗一『正法眼蔵用語辞典』、誠信書房、一九七五年二月、一四一頁）。**もはら**…専一に事をなすさま。また、すべてがそうであるさま。ひたすら。ひとえに（『角川古語大辞典』五、角川書店、一九九九年三月、六七七頁）。**善巧**…衆生の機根に応じて巧みに手立てをめぐらすこと（『中村仏教』八四八頁）。**正当恁麼時**…まさにこのようなとき。「仏性訳註（一）」八一頁参照。

【直訳】

十聖三賢が明らかにできるところではない。「衆生有仏性、衆生無仏性」と道取するのは、この道理である。成仏已来に具足する法であると参学するのは、正的である。このように学ばないのは、仏法ではないのである。このように学ばなければ、仏法はけっして今日には至らなかったであろう。もしこの道理をあきらかにしないのなら、成仏をあきらかにせず、見聞しないのである。そうであるから、五祖は向他道するのに、「嶺南人無仏性」と為道するのである。見仏聞法の最初に、難得難聞であるのは、「衆生無仏性」である。或従知識、或従経巻するのに聞くことで喜ぶべきことは「衆生無仏性」である。「一切衆生無仏性」を見聞覚知に参飽しないものは、仏性をいまだ見聞覚知しないのである。六祖が、ひたすら作仏をもとめるのに、五祖が、よく六祖を作仏させるのに、他の道取はない、善巧はない、ただ「嶺南人無仏性」という。

知るべきである、「無仏性」の道取・聞取、これが作仏の直道であるということを。そうであるから、「無仏性」の正当恁麼時が、そのまま作仏である。「無仏性」をいまだ見聞せず、道取しないのは、いまだ作仏していないからである。

【現代語訳】

〈仏性の道理は〉十聖三賢が明らかにできるところではない。〈潙山霊祐が〉「衆生有仏性、衆生無仏性」と表現したのはこの道理である。〈仏性は〉成仏して以来、具わる法であると参学するのが、最も正しいのである。このように学ばないのは、仏法ではないのである。このように学ばなければ、仏法はけっして今日に伝わらなかったはずである。もしこの道理を理解できないのであれば、成仏を理解できず、見たり聞いたりしないのである。そうであるから、五祖は六祖

に向かって言うのに、「嶺南人無仏性」と〈六祖の〉ために言ったのである。見仏聞法の最初に、得がたく聞きがたいのは、「衆生無仏性」である。善知識（正師）に従い、経巻を学ぶことにおいて、聞いて喜ぶべきことは、「衆生無仏性」である。「一切衆生無仏性」を見聞覚知により十分に参究しないものは、仏性をいまだ見聞覚知しないのである。六祖が、ひたすら作仏をもとめるのに対して、五祖が、よく六祖を作仏させた〈のであるが、そこにおいて〉、他の表現はなく、方便もなく、ただ「嶺南人無仏性」と言うのである。

「無仏性」と言うのも聞くのも、これが作仏そのものであるということを知るべきである。そうであるから「無仏性」のまさにこの時が、そのまま作仏である。「無仏性」をいまだ見聞せず、言わないのは、いまだ作仏していないからである。

【懐奘書写本に見られる書き改めについて】

「衆生無仏性と道取するところにこの道理なり」が「衆生無仏性と道取する、この道理なり」と改められている。この「ところに」は文意に大きな影響を与えていないので削除されたと考えられる。また、「具足する法なりと参学するを正的として学すべきなり」が「具足する法なりと参学する、正的なり」と改められている。接続助詞「として」を消し、「学すべきなり」を助動詞「なり」のみにしたことで簡潔に表したと思われる。また、「かくのごとく学せざるは、仏法にあらざるべし」の後に「かくのごとく学せずば、仏法あへて今日にいたるべからず」が加えられている。仏性は成仏以来具わる法であると学んだからこそ、現在に至るまで仏法が伝わっていると強調したものと思われる。

六祖いはく、人有南北なりとも、佛性無南北なり。この道取を擧して、句裏を功夫すべし。南北の言、まさに赤心に照顧すべし。六祖道得の句に宗旨あり。いはゆる、人は作佛すとも佛性は作佛すべからずといふ一隅の搆得あり。六祖これをしるやいなや。

四祖五祖の道取する無佛性の道得、はるかに導礙の力量ある一隅をうけて、迦葉佛および釋迦牟尼佛等の諸佛は作佛し轉法するに、悉有佛性と道取する力量あるなり。悉有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん。しかあれば、無佛性の語、はるかに四祖五祖の室よりきこゆるなり。このとき、六祖その人ならば、この無佛性の語を功夫すべきなり。

有無の無はしばらくおく、いかならんかこれ佛性と問取すべし、なにものかこれ佛性とたづぬべし。いまの人も、佛性とききぬれば、さらにいかなるかこれ佛性と問取せず、佛性の有無等の義をいふがごとし。これ倉卒なり。

しかあれば、諸無の無は、無佛性の無に學すべし。六祖の道取する人有

祖―右下「ノ」アリ（龍）　いはく―曰（抄）（瑠）
人―右下「ニ」アリ（龍）　人有―右「ニンウ」アリ（瑠）
北―右「ボク」アリ（瑠）　なり―也（瑠）、以下略
とも、佛性無南北なり―ナシ（乾）
性―右下「ニ」アリ（龍）　こ―此（瑠）、以下略
功―右「ク」アリ（龍）　言―右下「バ」アリ（龍）
赤心―右「セキシン」アリ（瑠）
照―右「セウ」、左「アキラム」アリ（瑠）
顧―右「コ」アリ（龍）（瑠）
祖―右下「ノ」アリ（龍）
道得―得ノ右下「テ」アリ（瑠）、右「ダウテ」アリ（長）（徳）　い―ゐ（瑠）　す―ナシ（玉）
一隅―一偶（乾）、「一」ノ右「チ」アリ（嘉）、「隅」ノ右「グ」アリ（抄）（瑠）（嘉）、左「ヒトスヂノ義也」アリ（瑠）、「ヒトツト云義也」アリ（嘉）
搆得―搆ノ右「コウ」アリ（抄）（龍）（嘉）、右「コウテ」アリ（瑠）、「コウトク」アリ（長）
これ―是（瑠）、以下略
導―底本「罣」、（懐）（抄）（乾）（正）（龍）（洞）（瑠）（長）（徳）ニヨリ訂、右「ケゲ」アリ（抄）
隅―偶（懐）（乾）　釋―尺（抄）　轉―傳（抄）
有―下「佛」、左「○（見セ消チノ記号）」アリ（懐）
五祖―ナシ（瑠）　とき―時（瑠）
き―左「シ」アリ（乾）　問―聞（乾）（玉）
さらに―ナシ（洞）（瑠）（嘉）、左「ヒヒヒ（見セ消チノ記号）」アリ（懐）　これ―ナシ（乾）（正）（龍）
問―聞（乾）　義―儀（瑠）
倉卒―右「サウソツ」アリ（龍）
人有南北、佛性無南北―人有南北佛性無南北（龍）

南北、佛性無南北の道、ひさしく再三撈摝すべし。まさに撈波子に力量あるべきなり。六祖の道取する人有南北、佛性無南北の道、しづかに拈放すべし。おろかなるやからおもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、佛性は虚融にして南北の論におよばず、と六祖は道取せりけるか、と推度するは、無分の愚蒙なるべし。この邪解を抛却して、直須勤學すべし。

無―右下「キ」アリ（龍）　ひさし―久（瑠）
撈摝―摝撈（正）、右「ラウロク」、左「魚ヲスクウ義也」アリ（嘉）
撈波子―右「ラウボス」アリ（瑠）（長）（玉）、波子ノ右、「ボス」アリ（徳）、上欄に「撈波子ハ水器也タトヘバシタミコス義也」アリ（長）（玉）
有南北、佛性無南北―有南北、佛性無南北（龍）
づ―す（玉）
拈放―右「ネンハウ」、左「ナラウ義也」アリ（瑠）、右「ナラウ義也」アリ（長）、左「ナラウ義ナリ」（徳）
お―を（洞）　お―ヲ（抄）（乾）　は―ナシ（乾）
質礙―質ノ右「ゼチ」アリ（嘉）、左「サハリ」アリ（玉）（徳）
虚融―右「コユウ」、左「トホレル」アリ（長）（玉）（徳）、「ウツケタル義也」アリ（嘉）
推度―右「スイタク」、左「ハカラウ」アリ（瑠）（長）（徳）（玉）、下「スレバ」アリ（乾）　は―わ（長）
愚蒙―左「オロカナルヒト」アリ（瑠）、「オロカナル人」アリ（長）（玉）
抛却―右「ハウキヤ」、左「ナゲステテ」アリ（瑠）（玉）、右「ハウキャ」、左「ナゲステ」アリ（長）、下「シ」アリ（嘉）　して―ナシ（瑠）
直須―右「ヂキシュ」、左「タダチニツトメマナブベシ」アリ（瑠）、直ノ下「ニ」、須ノ下「ク」アリ（龍）

【懐奘書写本】

六祖いはく、人有南北なりとも、佛性無南北なり。この道取を擧して、句裏を功夫すべし。南北の言、まさに赤心に照顧すべし。六祖道得の句に宗旨あり。いはゆる、人は作佛すとも佛性は作佛すべからずといふ一隅の搆得あり。六祖これをしるやいなや。

四祖五祖の道取する無佛性の道得、はるかに导礙の力量ある一偶をうけて、迦葉佛および釋迦牟尼佛等の諸佛は、作佛し轉法するに、悉有佛性と道取する力量あるなり。悉有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん。しかあれば無佛性の語、はるかに、四祖五祖の室よりきこゆるなり。このとき、六祖その人ならば、この無佛性の語を功夫すべきなり。

有無の無はしばらくおく、いかならんかこれ佛性と問取すべし、なにものかこれ佛性とたづぬべし。いまの人も佛性ときゝぬれば、さらにいかなるかこれ佛性と問取せず、佛性の有無等の義をいふがごとし。これ倉卒なり。

しかあれば諸無の無は、無佛性の無に學すべし。六祖の道取する人有南北、佛性無南北の道、ひさしく再三撈摝すべし。まさに撈波子に力量あるべきなり。六祖の道取する人有南北、佛性無南北の道、しづかに拈放すべし。おろかなるやからおもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、佛性は虚融にして南北の論におよばず、と六祖は道取せりけるか、と推度するは、無分の愚蒙なるべし。この邪解を抛却して、直須勤學すべし。

【語註】

六祖いはく、人有南北なりとも、仏性無南北なり…六祖慧能の出自等は、本稿八頁【語註】を参照されたい。「人有南北なりとも、仏性無南北なり」の句は、『景徳伝燈録』巻三「大満弘忍章」にみられる（本稿二四頁の【解説】参照）。**句裏**…裏はうち、句の内容の意（『禅学』二二五四頁）。**赤心**…まごころ、誠意、丹心（『大漢和』十・八一五頁）。ここでは、ありのまま、素直に、の意か。**一隅の搆得**…「一隅」は、物事の一面（『漢辞海』二頁）。「隅」は、全体のうちの一部で部分的なこと（『漢辞海』一五一五頁）。「搆得」は、ずばりと見て取る、ぴたりと到達する（『禅語』一三九頁）。**导礙**…「导」は、「礙」に同じで、さまたげること（『大漢和』四・六頁）であるため、底本の「罣礙」と同意。「罣礙」は、妨げること。転じて菩提心を妨げる煩悩や妄想をいう（『禅学』二二五八頁）。ここでは、一体になっていることを指す。「仏性訳註（二）」一五三頁参照。**無無の無**…この句の出典は、『景徳伝燈録』巻五「匾担曉了章」の「師、得無心之心、了無相之相。無相者森羅眩目、無心者分別熾然。絶一言一響。響莫可伝、伝之行矣、言莫可窮、窮之非矣。師、自得無無之無、不無於無也。吾今、以有有之有、不有於有也。不有之有去来非増。不無之無涅槃非減（師、無心の心を得て、無相の相を了ず。無相なれば森羅、目眩み、無心なれば分別熾然たり。一言一響を絶す。響の伝うべきもの莫く、之を伝えんとすれば行り、言の窮むべきもの莫く、之を窮めんとすれば非なり。師、自ら無無の無を得て、無に無ならず。吾

れ今、有有の有を以て有に有ならず。不有の有は去来するも増すに非ず。不無の無は涅槃するも減ずるに非ず）」（『禅文化本』六九頁）である。暁了（生没年不詳）は、唐代の人。六祖慧能の弟子で、匾担山に住した。『正法眼蔵抄』には、「無ミノ無ノ事、有ヲ無トナシ、無ヲ有ト云ハムニハアラス。有ト無ト、タケヲヒトシト云ハム為ニ、無ミノ無ニ嗣法セサラムヤト云也」（『蒐書大成』十一・一一七頁）とあり、「有」と「無」が同一のものであるとしている。**倉卒**…にわかに。深い考えもなく軽率に行動すること（『禅学』七四一頁）。**撈摭**…「魚ヲスクウ義也」（嘉元二年書写本傍注、『蒐書大成』四・五八三頁、本段【校異】参照）。『景徳伝燈録』巻二十八「汾州大達語」に、「汝等諸人、儻不如是、祖師来至此土、非常有損有益。有益者百千人中、撈摭一箇半箇堪爲法器。有損者如前已明（汝等諸人、儻し是の如くならざれば、祖師来りてこの土に至れるも、非常に損有り、益有り。益有りとは、百千人中より一箇半箇の法器と爲すに堪ゆるを撈摭す。損有りとは、前に已に明かすが如し）」（『禅文化本』五八八頁）とある。**撈波子**…蝦（えび）や蜆（しじみ）を取るときに用いる竹製の漁具（『禅語』四九三頁）。ここでは、優れた弟子を探し出せる師匠のこと。『正法眼蔵抄』には、「撈波子トハ、只ネムゴロニ功労スル体ノ詞也」（『蒐書大成』十一・一一三頁）、「撈波子ハ水器也。タトヘバ、シタミ（滑）コシ、ナムトスル心地也」（『蒐書大成』十一・一一七頁）とある。**拈放**…拈は拈得。放は放下（『禅学』一〇〇五頁）。師が弟子を接化する手段で、引っ掴まえたり、つき放したりすること。**質礙**（ぜちげ）…ぜつげ。色法のもつ性質で、物質として一定の空間を占め、他を障礙すること。変礙（『禅学』六六二頁）。同一時に同一場所を占めないこと。物体が特定の場所を占めて、他のものを入れないこと。物質的な障りのあること。色（ⓢrūpa）の特質（『中村仏教』八三三頁）。**虚融**…虚空のようで融通自在なこと（『中村仏教』三五一頁）。形がないので場所をとらずどこまでもすき透っていること。仏性の無形相・無辺際性をいう（『禅学』三六〇頁）。**推度**…推量する。推し量る。想像する（『大漢和』五・二九七頁）。**無分**…能力や資格がないこと。**愚蒙**…愚痴蒙昧の略。愚かにして道理に昧い（『禅学』二五三頁）。**邪解**…誤った理解。**直須勤学**…「直に須く勤学すべし」。あらゆるものを抛って、直ちに参究しなければならないこと（『禅学』四二〇頁）。

【直訳】

六祖はいった、「人有南北なりとも、仏性無南北なり」。この言葉を取りあげて、句意を功夫すべきである。南北の語は、まさに赤心に照顧すべきである。六祖が道得した句に宗旨がある。いわゆる、人は作仏するが、仏性は作仏するは

ずがないという一つの捉え方がある。六祖はこれを知っていたのであろうか。

四祖・五祖の言っている「無仏性」の言葉は、はるかに罣礙の力量がある一つの在り方を承けて、迦葉仏および釈迦牟尼仏等の諸仏が作仏し転法するのに、「悉有仏性」と言ってのける力量があるのである。「悉有の有」は、どうして「無無の無」に嗣法しないことがあろうか。そうであるから、「無仏性」の語は、はるかに四祖・五祖の室内から聞こえて来るのである。このとき、六祖がその人ならば、この「無仏性」の語を功夫しなければならない。

「有無の無」はしばらく置き、「いかならんかこれ仏性」と問うべきである。「なにものかこれ仏性」とたずねるべきである。今の人も、「仏性」と聞いたならば、さらに「いかなるかこれ仏性」と問わずに、仏性の有無等の義をいうばかりである。これは倉卒である。

そうであるから諸無の無は、「無仏性」の無に学ぶべきである。六祖の言っている「人有南北、仏性無南北」の言葉は、久しく再三撈摭すべきである。まさに撈波子に力量があるべきである。六祖の言っている「人有南北、仏性無南北」の言葉は、しづかに拈放すべきである。愚かな者たちが思うには、「人間は質礙するから南北があるが、仏性は虚融で南北の論におよばないと六祖は言ったのか」と推度するのは、無分の愚蒙であるに違いない。この邪解を抛却して、直須勤学すべきである。

【現代語訳】

六祖は云った、「人有南北なりとも、仏性無南北なり（人には形質があって南や北の違いがあっても、仏性には南や北の違いはない）」と。この説示を取りあげて、その言葉の内容をよく考えてみなくてはならない。「南北」の言葉は、そのまま素直に（偏見を交えずに）省察しなければならない。この六祖の言い得た言葉には重要な宗意が含まれている。それは、「人は仏になることはあっても、仏性は仏になるはずがない」という一つの捉え方がある。六祖は、このことを知っていたのであろうか。

四祖・五祖の言っている「無仏性」の言葉は、はるか昔（迦葉仏および釈迦牟尼仏の頃）に〈仏性と一体となって〉力を発揮していた一つの在り方を承け伝えて〈来た言葉であり〉、迦葉仏および釈迦牟尼仏等の諸仏は、仏となり説法するにあたり、「悉有仏性」（全てが仏性である）と言い表す力量があったのである。「悉有の有」は〈有は、仏性が有ると

いう「有」ではないのであるから〉、どうして「無無の無」（無いという「無」ではない「無」）に受け嗣がれないことがあろうか〈いや、受け嗣がれているのである〉。そうであるから、「無仏性」の言葉は、はるか遠い時代の四祖・五祖の出会いの場から伝えられてきたのである。このとき、六祖がそのような（仏法を会得した）人であるならば、この「無仏性」の言葉をよく考えなければならない。

〈仏性が〉有るとか無いとかの議論はここではやめて、何ものが「仏性」かと問わなければならない。何ものが「仏性」なのかと尋ねなければならない。今の人も「仏性」と聞いたならば、さらに「仏性とは何か」と問い正さずに、〈ただ〉仏性が有るか、無いかなどの意義を論ずるばかりである。これは軽率なことである。

そうであるから（「無」は無いという「無」ではないから）、〈仏祖がいう〉諸々の「無」は、「無仏性」の「無」に学ばなければならない。六祖の説示する「人有南北、仏性無南北」の言葉は、長い時間をかけて幾度もその深意を理解しなければならない。まさしく、取り挙げる者に力量（深意をくみ取る力）がなければならない。六祖の言っている「人有南北、仏性無南北」の言葉を、静かに（落ち着いて）あれこれとよく考えなければならない。愚かな者が思うには、〝人間には資質や性質の違いがあるために南や北といった地域による違いがあるが、仏性は虚空のように融通自在に行きわたっているから南だとか北だとかの違いを論ずるには及ばない〟と六祖が言ったのであろうかと推測するのは、〈仏法を理解する〉能力がなく道理に暗いからに違いない。そのような誤った解釈を投げすてて、直ちに勤勉に学ぶべきである。

【懐奘書写本について】

本段の【校異】に示したように「一隅」の「隅」を「偶」とした箇所がみられる。意味の上から考察すると、「一隅」ならば「全体の内の一部、部分的なこと」（『漢辞海』一五一五頁）の意味であるのに対し、「一偶」ならば「二で割れる数」（『漢辞海』一一二頁）、つまり偶数の意味であるから、「一対」の意味となる。『正法眼蔵抄』は、「隅」に改めている（『蒐書大成』十一・一一二頁）。

【解説】

以下、本稿三頁の【本文】で示した①～④の区切りに従って全体を解説する。

①段では、五祖弘忍と六祖慧能の「嶺南人無仏性」の話が挙げられ、道元禅師の「嶺南人無仏性」に対する解釈が説かれ、正伝の仏法における「仏性の道理」が示されている。通常この話は、五祖が六祖の出自を尋ね、六祖が「嶺南人」（嶺南地方の出身）と答えると、五祖が「何を求めて来たのか」と質問し、六祖が「作仏を求めてきた」と答えたのに対し、五祖が「嶺南人には仏性は無い、どうして作仏ができよう」と言ったという話である。

しかし道元禅師は、この「嶺南人無仏性」というのは「嶺南人には仏性は無い」と言ったのではないとし、だからといって「嶺南人にも仏性が有る」と言ったのでもなく、ただ「嶺南人無仏性」と言ったのであるとする。

②段でも道元禅師は、「六祖もはら作仏をもとむるに、五祖よく六祖を作仏せしむるに、他の道取なし、善巧なし、ただ嶺南人無仏性といふ。しるべし、無仏性の道取聞取、これ作仏の直道なりといふことを」（二〇頁）と示すが、この「嶺南人無仏性」の「無仏性」という語を言ったり聞いたりすることが「作仏」（仏となること）に直結する道であるという。つまりこの「無仏性」という語をどう会得するかが「作仏」に密接に関わるのであり、「無仏性」ということが「作仏」そのものであるとも受け取れる。それでは「無仏性」とはどのような意なのか。

ここで「いかにしてか作仏せんといふは、いかなる作仏をか期するといふなり」という説示が重要であると思われる。通常では五祖が言った「いかにして作仏せん」は〝どうして作仏できようか（いや、作仏できない）〟と解釈されるが、道元禅師は「いかにしてか作仏せん」というのは「いかなる作仏をか期する」という意味であるとする。「いかなる作仏をか期する」というのは、〝どのような作仏を期待するのか〟〝いったい「作仏」とはどのようなことなのか〟と「作仏」の意味を問いかける疑問の言葉とも理解できるが、ここでは「すでに仏であるのに、さらになぜ仏になることを期待するのか」という意味に解釈すべきであろう。「作仏」という語については、『正法眼蔵』「坐禅箴」巻に、道元禅師の拈提がある。そこでは「学道のさだまれる参究には坐禅弁道するなり。その榜様の宗旨は、作仏をもとめざる行仏あり」（九一頁）と示し、坐禅とは「作仏」（仏と作ること）をもとめない「行仏」（仏を行ずること）であるとする。よってここで示される「作仏」も肯定的に用いられているのではなく、すでに仏であるから作仏を求める必要がない意と解釈した方がよいと思われる。

また、「仏性の具足」と「成仏」との関係に関する説示は、「仏性」巻の中でも重要な説示であると考えられる。「仏性は成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり」とは、「仏性の具足」と「成仏」の同時性を示した説示であり、懐奘書写本から知られる書き改めでは、それを明確にするために「仏性かならず成仏と同参するなり」という文が加えられたものと考えられる。「同参」とは『正法眼蔵』「栢樹子」巻にも「仏性は成仏以後の荘厳なり、さらに成仏と同生同参する仏性もあるべし」（三五二頁）という同様な説示が見られるが、「同参」と「同生」とは同意であり、「仏性の具足」と「成仏」が同時のものであることを示している。よって道元禅師が示す「仏性の道理」とは、「成仏」以前からもともと持っている〝成仏の可能性〟ではなく、仏行（仏の行＝修行）を行ずるところに現れるものであって、「成仏」の意味についても、修行のところに現れる仏としてのあり方という意味と捉えることができるのである。

②段では、この「仏性の道理」が「十聖三賢のあきらむるところにあらず」とするが、『正法眼蔵』「行仏威儀」巻でも「行仏の威儀を覷見せんとき、天上・人間のまなこをもちいることなかれ、天上・人間の情量をもちいるべからず、これを挙して測量せんと擬することなかれ。十聖三賢なほこれをしらず、あきらめず、いはんや人中天上の測量のおよぶことあらんや」（五〇頁）と示すように、道元禅師においては「十聖三賢」は否定的に用いられることが多い。先に述べたように「仏性」と「行仏」とは関連するが、「仏性の具足」と「成仏」とが、「行仏」ということにおいて「同生同参」するのであれば、菩薩の階梯に基づく「十聖三賢」の立場とは基本的に背反するのであり、道元禅師が「十聖三賢」は知らず明らめ得ないと、「仏性」巻や「行仏威儀」巻において批判することは首肯できる。

また、仏性が「成仏已来に具足する法なりと参究する、正的なり」は、①段の「仏性の道理は、（中略）成仏よりのちに具足するなり。仏性かならず成仏と同参するなり」と同意であるが、この道理によって五祖は「嶺南人無仏性と為道するなり」、つまり「嶺南人無仏性」と言ったとするのである。つまり、仏性は〝成仏と同時に現成する〟或いは〝成仏以後に具足する〟のであるから、未だ成仏していない六祖には、仏性は無いということになるのであるが、しかしながら、仏の行を行ずれば現成するという点からは「仏性なしというにあらず」ということになり、また道元禅師にとって仏性は〝成仏の可能性〟としての仏性ではないので「仏性ありといふにあらず」というのである。そのような意味から道元禅師は、五祖の言った「無仏性」を、「なしといふにあらず」「ありといふにあらず」と示されるのであり、「無仏性」とは、〝成仏の可能性〟を前提としての「無い」とか「有る」とかに関わらない「仏性」をいい、成仏と同参する

「仏性」をいうのであると考えられる。

「仏性」巻の後半に塩官斉安の「一切衆生有仏性」と、潙山霊祐の「一切衆生無仏性」（二七～二八頁）が取り上げられており、さらに道元禅師の拈提があるが、先に「仏性訳註（一）」八三頁では「悉有仏性」を〝修行している当体に仏性が現れているという現前の事実を示したもの〟と解釈し、「仏性訳註（三）」では「汝無仏性」を〝無い〟というのではなく、仏性となりきっていることを言うのであろうと述べたが（三六頁）、ここでの「無仏性」も同様な意味として示されている。

③段では、六祖が「人有南北なりとも、仏性無南北なり（人には南北があっても、仏性には南北はない）」と答えた語を取りあげている。ここで問題となるのが「人は作仏すとも仏性は作仏すべからずという一隅の搆得あり」という説示である。〝「人は仏になることはあっても、仏性は仏になるはずがない」という一つの捉え方がある〟と現代語訳したが、「一隅の搆得」を〝一つの捉え方〟と訳すことが妥当であるかどうか覚束ないが、「一隅の搆得」とは謙遜した言い方と受け取れるものの、道元禅師が言い得た言葉と思われる。「人は作仏す」とは、われわれが仏の行を行うことによって仏のあり方が現れるのであるから、それが「人は作仏す」ということであり、「仏性は作仏すべからず」とは、〝作仏している仏性がさらに作仏することはない〟という解釈になると思われる。道元禅師の言う仏性が「成仏の可能性」ではないことは確かであり、「悉有仏性」を「悉有は仏性なり」（全てが仏性である）と解釈される道元禅師であるから、〝作仏している仏性がさらに作仏することはない〟という解釈が成り立つ。先に「いかにしてか作仏せん」の解釈で述べたように、「すでに仏であるのに、さらになぜ仏になることを期待するのか」ということであり、「嶺南人無仏性」も〝嶺南人もすでに仏であるのだから、さらに仏になる必要はない〟ということになる。

ところで「六祖これをしるやいなや」の解釈が問題となる。その次の文節にある「このとき、六祖その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり」も同様に問題である。「六祖これをしるやいなや」は「六祖は知っていた（分かっていた）のであろうか」と疑問を呈した語と解釈できるが、この「南北の言」を「六祖道得の句に宗旨あり」というのであるから、六祖は道元禅師の言う「人は作仏すとも仏性は作仏すべからず」という意味で「南北の言」を語ったということにもなり、であれば「まさに知っていたのである」「知っていたに違いない」と解釈したい。

「このとき、六祖その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり」は〝このとき、六祖がそのような（仏法を会得し

た）人であるならば、この「無仏性」の言葉をよく考えなければならない〟と現代語訳したが、六祖がその人（仏法を会得した人）であるからこそ、その人の言葉をしっかりと参究しなければならないのである。

「無無の無」とは、【語註】で述べたように暁了の語であるが、ここでは〝無いという「無」ではない「無」〟と現代語訳した。「悉有仏性」の「有」も、仏性が〝有る〟という「有」ではないように、「無仏性」の「無」も〝無い〟という「無」ではない。どちらも「有る」「無い」の「有無」ではないことから、「悉有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん」と、その意味での正統性・同一性を「嗣法」という語を用いて示したのであろう。

「おろかなるやからおもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、仏性は虚融にして南北の論におよばずと六祖は道取せりけるかと推度するは、無分の愚蒙なるべし」という説示は重要である。道元禅師が「おろかなるやからおもはくは」として挙げている考え方は、道元禅師が批判する典型的な「邪解」を明確に示したものであるからである。そしてそれは、六祖の「人有南北なりとも、仏性無南北なり」についての一般的な解釈と言えるものであり、これを「邪解」としていることに注意しなければならない。その「邪解」とは、仏性は全ての人間に〝有る〟のであり、人間には悉く成仏の可能性を持っているという見解である。この「邪解」を捨て去ることこそ「仏性」理解において重要であることを、この五祖と六祖の問答の段で、道元禅師は示している。

六祖示[二]門人行昌[三]云ク、無常者卽佛性也、有常者卽善惡一切諸法分別心也。

いはゆる六祖道の無常は、外道・二乘等の測度にあらず。二乘・外道の鼻祖鼻末、それ無常なりといふとも、かれら窮盡すべからざるなり。しかあれば、無常のみづから無常を説著・行著・證著せんは、みな無常なるべし。今以現自身得度者、卽現自身而爲説法なり、これ佛性なり。さらに或現長法身、或現短法身なるべし。常聖これ無常なり、常凡これ無常なり。常凡聖ならんは、佛性なるべからず、小量の愚見なるべし、測度の管見なるべし。佛者小量身也、性者小量作也。このゆゑに六祖道取す、無常者佛性也。常者未轉なり。未轉といふは、たとひ能斷と變ずとも、たとひ所斷と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかはれず。ゆゑに常なり。しかあれば、艸木叢林の無常なる、すなはち佛性なり。人物身心の無常なる、これ佛性なり。國土山河の無常なる、これ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提、これ佛性なるがゆゑに無常なり。

示―右下「メ」アリ（正）龍、「シテ」アリ（長）（玉）
行昌―右「キャウシャウ」アリ（瑠）
昌―右「シャウ」アリ（抄）（嘉）、昌ノ右下「二」アリ（抄）（龍）（長）（玉）　云―右下「ク」アリ（抄）
者―右「シャ」アリ（瑠）、以下略
卽―右「スナハチ」アリ（瑠）、右下「チ」アリ（長）（玉）（徳）
性―右下「ノ」アリ（瑠）
也―右「ナリ」アリ（長）（玉）、以下略
別―右下「ノ」アリ（龍）　は―わ（瑠）
測度―右「シキタク」、左「ハカリハカル」アリ（抄）（長）（徳）、測ノ右「シキ」アリ（龍）（玉）
鼻祖鼻末―右「ビソビマツ」アリ、末ノ左「ヲハリ」アリ（瑠）、上ノ鼻ノ左「ハジメ」、下ノ鼻ノ左「ヲワリ」アリ（長）
窮―右「クウ」アリ（瑠）　の―ナシ（乾）
著―着（正）、左「シャ」アリ（長）（玉）
ん―む（抄）
は―ナシ（洞）　今―右下「ニ」アリ（龍）
以―右下「テ」アリ、左下「レ（返り点）」アリ（龍）
現―右下「ルヲ」アリ（龍）
度―右下「ルハ」アリ（龍）
なり―也（正）（瑠）、以下略
これ―是（瑠）、以下略
聖―右「シャウ」アリ（瑠）　ん―む（洞）
愚見―右「クケン」、左「ヲロカナルヲモイ也」アリ（瑠）、右「ヲロカナルヲモイナリ」アリ（長）
管見―右「クワン」、左「タケノツ、也」アリ（抄）
見―左「ミタル」アリ（瑠）
小―右「セウ」アリ（瑠）
也―ヤ（玉）（嘉）、右「ヤ」アリ（長）（瑠）（嘉）、以下略
性―右下「ウ」アリ（瑠）

大般涅槃、これ無常なるがゆゑに佛性なり。もろもろの二乗の小見、お*よび經論師の三藏等は、この六祖の道を驚疑怖畏すべし。もし驚疑せん*ことは、魔外の類なり。

※懐奘書写本の書き改めナシ。

ゑ―へ（懐）（乾）（龍）（洞）（長）（玉）（嘉）、以下略、者―ナシ（乾）
なり―也（長）（玉）、右「ナリ」アリ（長）
い―ゆ（瑠）　ひ―い（瑠）（嘉）、以下略
蹤跡―右「セウセキ」アリ（抄）、跡ノ右下「ニ」アリ（乾）（長）
か―、（懐）（抄）（乾）（正）（龍）（洞）（瑠）（長）（玉）（徳）（嘉）
ゑ―へ（徳）　すなはち―便（瑠）
人―右「ニン」アリ（瑠）
これ佛性―これ佛これ佛性、「佛これ」の左「○○○」（見セ消チ）アリ（懐）
り―右「ツ」アリ（乾）　が―ナシ（洞）（瑠）（嘉）
ゑ―へ（正）、以下略　これ―これは（洞）
なり―也（乾）
もろ―〳〵（懐）（乾）（龍）（洞）（瑠）（長）（徳）
お―を（洞）（瑠）
この―ナシ（乾）、此、右「コノ」アリ（瑠）
を―お（嘉）
驚疑怖畏―左「ヲドロキウタガフヲソ」アリ（瑠）
もし―ナシ（乾）（正）（龍）（長）（玉）
は―に（乾）

【語註】

六祖示門人行昌…出典は『景徳伝燈録』巻五「江西志徹章」であり、「祖曰、無常者即仏性也、有常者即善悪一切諸法分別心也（祖曰く、無常は即ち仏性なり、有常は即ち善悪一切諸法分別心なり）」（『禅文化本』七二頁）とある。**行昌**（**志徹**）…（生没年不詳）唐代の人。六祖慧能の法嗣。江西省の人で、江西志徹ともいう。俗姓張氏。名は行昌。幼にして任侠の志あり。北宗の神秀の門徒、慧能をにくむ余り、行昌をして慧能を斬らしめんとしたが、行昌かえってこれに感じ、その門に入り、涅槃の了義を知るにいたり、慧能より志徹と名づけられたという（『禅学』四五六頁）。『御抄』では、「神秀弟子ニ被レ語テ、神秀ヲ六祖ト号セム料ニ、忽ニ六祖ヲ欲レ奉レ害トシタリシ人也（神秀の弟子に頼まれて、神

秀を六祖と称号させるために、すぐさま六祖を殺そうとした人物である）」（『蒐書大成』十一・一二二頁。口語訳は、伊藤秀憲「『正法眼蔵抄』口語訳の試み・仏性㈤」、『駒澤大学仏教学部論集』第十七号、一九八六年一〇月、二一七頁）とある。**分別心**…種々に差別する心（『禅学』一一〇五頁）。**二乗・外道（外道・二乗）**…二乗すなわち声聞乗・縁覚乗に属するものと、外道の衆。大乗仏教の道理を知らないものの総称として用いられる。時に凡夫と異生と併称される（『禅学』九八一頁）。**測度**…あれこれと推量すること。おしはかること（『禅学』四二一頁）。**鼻祖鼻末**…始祖と祖末・末孫（『禅学』一〇四四頁）。**説著・行著・証著**…説くこと・行ずること・証すること。著は助詞（『禅学』六六三頁・五五一頁ほか）。**今以現自身得度者、即現自身而為説法**（今自身を現わすを以て得度する者は、即ち自身を現わして説法を為す）…『法華経』「観世音菩薩普門品」第二十五の「応以仏身得度者、観世音菩薩、即現仏身而為説法、応以辟支仏身得度者、即現辟支仏身而為説法、応以声聞身得度者、即現声聞身而為説法（応に仏の身を以て度うことを得べき者には、観世音菩薩は、即ち仏の身を現わして、為に法を説くなり。応に辟支仏の身を以て度うことを得べき者には、即ち辟支仏の身を現わして、為に法を説くなり。応に声聞の身を以て度うことを得べき者には、即ち声聞の身を現わして為に法を説くなり）」（『大正蔵』九・五七頁）を踏まえた語。ここでは、無常そのものが無常を説き、行じ、証することを『法華経』の句を仮りて示したもの。**或現長法身、或現短法身**…『嘉泰普燈録』巻二「達観曇穎章」に、「問、如何是長法身。曰、拄杖長六尺。云、如何是短法身。曰、筭子短三寸。云、恁麼則法身有二去也。曰、更有方円在（問う、如何なるか是れ長法身。曰く、拄杖の長きこと六尺なり。云く、如何なるか是れ短法身。曰く、筭子の短きこと三寸と。云く、恁麼ならば則ち法身二つ有り去らん。曰く、更に方円の在る有りと）」（『五山版中国禅籍叢刊』一・三六〇頁）とある。『御抄』では、「又サラニ或現長法身、或現短法身ナルベシト云々、実於仏性ノ上談セム時ノ長法身短法身更不可拘長短ノ義」（『蒐書大成』十一・一二〇頁）とあり、仏法上では長短の意味に拘るべきでないことを示している。**常聖・常凡・常凡聖**…常凡聖は常凡常聖の略。恒常の凡夫、恒常の聖人（『禅学』五八六頁）。**未転**…いまだ転じないこと。転は転成、他のものとなること。未転は生滅去来に処して生滅去来しない不変のさま（『禅学』一一八五頁）。『私記』には、「常は未転なり。ゆえに常なりとは、未転とは無変易をいふ」（『蒐書大成』十九・五六八頁）とあり、『御抄』には、「未転ノ言葉ハ不会程ニ可心得也」（『蒐書大成』十一・一三六頁）とある。**能断・所断**…断ち切るものと断ち切られるもの。根と境。また識と塵と見ることができる（『禅学』一〇〇七頁）。**魔外**…天魔外道のこと。仏教以外の道を行い仏道を妨げ

るもの（『禅学』一一七二頁）。

【直訳】

六祖（慧能）が門人の行昌に示して言った、「無常は即ち仏性である、有常は即ち善悪一切諸法分別心である」と。

いわゆる六祖の言う「無常」は、外道・二乗等の測度ではない。二乗・外道の鼻祖鼻末が無常であると言っても、かれらは究尽できないのである。そうであるから、無常が自ら無常を説著・行著・証著するならば、みな無常であるだろう。今以現自身得度者、即現自身而為説法であり、これが仏性である。さらに或現長法身、或現短法身であるだろう。常聖は無常であり、常凡も無常である。常凡聖であるのなら、仏性であるはずはなく、小量の愚見であるにちがいなく、測度の管見であるにちがいない。仏は小量身であろうか、性は小量作であろうか。このゆえに六祖は言った、「無常は仏性である」と。「常」は未転である。未転というのは、たとえ能断と変ずるとも、たとえ所断と化すとしても、必ずしも去来の蹤跡には関わらない。だから「常」である。そうであるから、草木叢林が無常である〈ことが〉、まさに仏性である。人物身心が無常である〈ことが〉、仏性である。国土山河が無常である〈ことは〉、仏性であるからである。阿耨多羅三藐三菩提は、仏性であるから無常である。大般涅槃は、無常であるから仏性である。諸々の二乗の小見、および経論師の三蔵等は、この六祖の言葉を驚き疑い畏れるだろう。もし、驚き疑うのであれば、魔外の類である。

【現代語訳】

六祖（慧能）が門人の行昌に示して、「無常は即ち仏性である、有常は即ち善悪・一切諸法を分別する心である」と言った。

いわゆる六祖が言う「無常」は、外道・二乗等が考えているようなものではない。二乗・外道の始祖から末孫に至るまでが、「無常である」と言っていても、彼らは究め尽くすことができていないのである。そうであるから、無常自体が無常を説き・行じ・証するのであれば、みな無常であるだろう。今自身を現わして渡す者は、即ち自身を現わして説法をするのであり、これが仏性である。さらに或る〈場合は〉長法身を現わして、或る〈場合は〉短法身を現わして〈説法することも〉あるだろう。常聖といっても〈常に聖者であるというのではなく〉無常であり、常凡といっても〈常に

凡夫であるのではなく〉無常である。常に〈変わらず〉聖者・凡夫であるならば、〈それは〉仏性であるはずはなく、度量の狭い愚かな見解であるにちがいなく、推量しただけの管見である。「仏（ぶつ）」は狭い器量の身体であろうか、「性（しょう）」は狭い器量の働きであろうか〈いや、そうではない〉。そうであるから、六祖は「無常は仏性である」と言ったのである。「常」は未転である。未転というのは、たとえ凡夫が煩悩を断ずることによって（能断）、煩悩が断ぜられた（所断）聖者に変じ、化するといっても、決して、無常（行ったり来たりする形跡）には関わらない。だから「常」である。そうであるから、草木叢林が無常であることが、まさに仏性であるのである。人物（衆生）の身心が無常であること、これが仏性である。国土山河が無常であることは、仏性であるからである。阿耨多羅三藐三菩提は、仏性であるから無常なのである。大般涅槃も、無常であるから仏性なのである。諸々の二乗の狭い見解や経論師の三蔵等は、この六祖の言葉を聞いて驚き疑い畏れるにちがいない。もし、〈この言葉を聞いて〉驚き疑うのであれば、〈そのような人々は〉悪魔・外道の仲間である。

【解説】

この段は、『景徳伝燈録』巻五にある、六祖慧能が門人の行昌に説示した、〝無常は仏性であり、有常は全ての事物・事象を分別する心である〟という語を引用して、「無常」が「仏性」であることを示した段である。

先ず、六祖の門人である行昌という人物については、【語註】で記載している通り、当初は神秀の教団に属し、六祖慧能が五祖弘忍から法嗣の印として伝衣伝法された「伝衣」を略奪する為に、慧能を襲おうとしたが三度斬りかかるも害を与えることができず、却って六祖の徳に触れて、出家することになり、法嗣となったとされている人物である。この修行中の行昌に慧能が示したのが〝無上は仏性である…〟という説示である。

六祖の言う「無常」は外道や二乗などが考えているようなものではなく、彼等には理解することも究めることもできないものであるとするが、外道や二乗が考える「無常」とはどのような無常であるのかについては必ずしも明確にされていない。但し、一般的に説明される「無常」とは、〝常住不変でないこと〟〝あらゆるものは変化する〟ことをいうが、凡（迷）から聖（悟）を目指して修行するのが外道や二乗とすれば、無常であるから、修行することによって内なる仏性が顕現して成仏するという考え方となる。

しかしここで道元禅師は、「無常」であるから「仏性」が現れるのではなく、「無常」であること自体が「仏性」であるとし、「無常」自体が「無常」を説き、行じ、証していると説示する。つまり、道元禅師にとって「仏性」は仏の行を行ずる（説く、証する）ところに現れるのであり、仏の行を行じない（説かない、証しない）ところには現れないのであり、先に述べたように「仏性の具足」と「成仏」は同生同参するのであるから、外道や二乗が考えるところの〝凡（迷）から聖（悟）を目指して修行する〟のとは異なるのである。

ゆえに、道元禅師にとって、常凡（常に凡夫）であるとか、常聖（常に聖者）であることはなく、仏行を行ずれば、凡夫が聖者となり、仏行を行じなければ、聖者も凡夫となるのであって、仏行を行する「修行」ということが常に問題となるのである。それは常に「無常」なのであり、常凡聖（常に凡人であるとか、常に聖者であるとか）ではないのである。それを『正法眼蔵聞解』（『蒐書大成』十七・一六頁）では、「常住ノ聖人、常住ノ凡夫ガ是レ無常デ、凡聖共ニ無自性ナルモノデ無常也。三世常住、凡夫ハ凡夫、聖人ハ聖人デ不改ナモノナラバ、仏ハイツモ仏ニシテ、凡夫ハ常ニ凡夫也。其レデハ仏性デハ無ヒ」と述べている。

この「無常」に対するものが「常」であるが、「常」とは「未転」つまり〝転じない〟〝変化しない〟ことである。たとえ凡夫が煩悩を断じ（能断）、煩悩が断ぜられた（所断）聖者になっても、必ずしも無常（去来の蹤跡）とは言えず、それは「常」なのである。これについても『正法眼蔵聞解』（『蒐書大成』十七・一六頁）では、「未転トハ常住ノ方カラ云バ、無トモ有トモ不転。仏性常住タトヒ以智恵断煩悩、断ゼラルル所断ノ煩悩ヲ変ジテ智恵ト化スルトモ、処ヲカヘ品ヲカヘルコトデナヒ」と注解している。

この段では、「無常」なるものが「仏性」であり、人間の身心も、国土山河も、阿耨多羅三藐三菩提も大般涅槃も全てが無常であって、それが「仏性」であるとするのである。「仏性」は修行と一体のものであるからこそ「無常」であり、「無常」である「仏性」を不断の修行によって現し続けていくことが仏道といえるのであろう。

〈キーワード〉道元、懐奘、『正法眼蔵』、「仏性」巻、訳註、校異